

線香花火

夏は力尽きることないまま天に上り
秋は力づくで地上に割り込んでくる

だから、秋は何時でも突然に舞い降りて
私たちの準備を追い越してしまう

夏の終わりに灯そうとして
大事にしまっておいた線香花火——

君は寒さに震えながらそれを手にし
僕はそれに火を近づける

星のような澄んだ光は小さく瞬き
消えてしまった季節を追いかけ、消えてゆく

名残を惜しむ暇もなく息を引き取るように
呆気ない輝き・・・

私たちはこれまでに何度
これを繰り返し受け止めてきたろうか

君は突然しゃくりあげるように呟く
「あなたを見送るときには・・・」と

いずれ、どちらかが先に逝くにせよ
どちらかが残ることになる、と

ハンモックのような黄色い半月は
黄泉の国へと託す願いを乗せているかのようだ

オレンジ色の老いた恒星のように太った球体が
今、重力に吸い寄せられようとしている

私たちが生れ落ちた、この世界というもの——
それがなかったなら、この温もりもなかった

ただ、そのことのみが確かなことであって
同時に、余りに儚いことなのかもしれない

線香花火に火を灯すと
無限の夜空へと吸い込まれてゆく気がする

君が僕の掌を握りしめるのは
死後の絆を確かめようとする為なのか

生きるに値するか否かは問題ではない
生きたいと願うかどうか、ただ

私は生きたい
生きて
この掌を握っていたい
ただ、それだけだ

愛おしむように
線香花火は瞬いている
生きて
そして、消え去るために

(2012.10.8)